

文学部という進路

文学部 鈴木 淳

文学部は、専修課程によって進学後に学ぶことや学生の進路がかなり異なる。また、進学ガイダンスの時に自分の属する日本史学研究室への進学を考える学生の相談に応じるだけでも、学生たち一人一人が性格も経歴も、そして目指すものも異なることを痛感する。それゆえ、一番良心的な対応は、時代は違うが、と断りながら自分の一例を語ることになる。

しかし、その手はずですべて使ってしまった。もし読みたければ、文学部ホームページのエッセイ「私の選択」を見ていただきたい。少なくともここで見られる他の先生方の「一例」は有益であろう。さて、そのような事情で、ここでは、あくまでも管見で、と断りながらも文学部という進路について語ることを試みたい。

私は1982年に文科三類に入学して以来、駒場と本郷で、仲間や後輩たちの進学選択とその後を見てきたが、国史学、現在の日本史学専修課程を卒業し、駒場で5年余りの勤務も、後期課程では今はない比較日本文化論分科であったから、管見は日本の歴史に関心を持った人々を中心とするという偏りがある。

文学部での学びは、経済学部生や法学部生が経済学や法学の基礎知識や発想法を身に付けるといったような、わかりやすい社会人としての有用性をもたらすものではない。では、何を学ぶのか、という問いへの答えは、「学問」である。

他学部で研究され教授されているものも学問であるが、文学部の学問は身に着けることが社会的役割、ありていに言えば就職に結びつくことが自明ではない学問である。

もちろん、我々のように大学で学んだ専門を教える教員にとっては、文学部で学んだ学問が職業に直結している。社会的役割を果たして報酬を得ているのだから、社会的有用性があるつもりだ。これは、学芸員や中等教育の教員などとも共通しており、文学部で学ぶことの意義の一つである。しかし、このように、仕事の一部として学問を担い、伝える立場

に立つものは、文学部では文系他学部より比率が高いとはいえ、3分の1程度であり、多数派とは言えない。

それなら、文学部の定員を3分の1に減らし、学問を担い、伝える立場に立つ職業人を養成する学部の特化して内容を充実させれば良い、という考え方もあり得る。しかし、文学部教員の多くはそうは考えていない。理由は、そうすると教員数が減らされて自分の地位が危うい、ということはさておいても、2つはある。

第1は、各専修で学んだ学生の内どれだけが、その学問を担う立場になりたいと考えるか、という問題である。歴史が好きで、東大文学部の日本史に進み、高校時代からあこがれていた教員の指導を受けた学生が、必ずしもその学問の担い手になりたいと考えるわけではない。学問の成果を享受する立場と、学問する立場がちがうことは初年次ゼミナール以来聞かされているであろうが、それぞれの学問には固有の性格があり、実際にとり組んで初めて分かることも多い。日本史で言えば、東京大学の学問の特色は「実証史学」であり、学部段階では歴史哲学を踏まえた歴史の描き方ではなく、史料をしっかりと読み込み、根拠を持って語る姿勢が求められる。それを好むかどうかは、進学選択の点数はもちろん、歴史の本を読むことが好きかどうかとすらあまり関係がない。

文学部の進学者の大半が、一度は大学院進学を考えたことがあるようだが、大学院進学者が多い日本史学でも同級生の半数以上が受験することはない。大学院に進まないなら、就職活動や、公務員試験等の受験勉強が必要となるから、3年の夏ころに決断する学生が多く、文学部進学後に、自らがその学問を担うに適しているかどうか判断する期間はそう長くはない。

第2の理由は、学問はそれを担う職業人として生きるための手段にとどまらない、と我々が考えているからである。学問を通じて、職場や地域社会の風潮に流されず、自ら考える姿勢を持った社会人を送り出したいという願いがある。

例えば、政治家や官僚にこそ歴史に対する学問的な姿勢が大事である、と私は思うので、優秀な学生がそのような進路を求めれば喜んで送り出す。優れ

た政治家や官僚に必要なのは、歴史に関する学問的姿勢だけではないであろう。

大手総合商社に入ったある同級生は、中小企業の経営者と仕事上の話をする時、まずその会社と自社との取引の歴史を調べ、それを話題にして経営者から詳しく話を聞くところから始めたという。少なくとも本人は、それが国史学専修で培われた姿勢であり、お互いにとって良好な関係を生み出したと言っている。また、近年、卒業後専門職大学院に進む学生も少なくないが、日本史学から本学の法科大学院に進学した学生の1人は、大学院での勉学で、日本史学で身に付けた、「気になったら調べる」姿勢や手法が役立っていると話してくれた。文学部で身につけたことは、本人が意識すると否とに関わらず、その人の個性の一部となって仕事やさらなる勉学の上で生かされているのであろう。

学問は仕事に生かされるだけではない。毎年11月に本郷で行われる史学会大会には、多くの文学部出身歴史研究者が集まるが、歴史研究を職業としなくても参加してくれる卒業生がいる。東北で実家の農家を継いだある卒業生は、毎年、収穫したばかりの林檎を車に積んで上京して学会に参加し、研究室に林檎を届けてくれる。歴史学が農家経営に直接役立つわけではないが、人生は職業だけではない。農繁期を終えたところで学会に参加して学問の新しい流れに触れ、また旧交を温める習慣は文学出身者ならではの精神的に豊かな生活であるように思う。学問を大切に生きていくことは教育・研究の職業人の特権ではないのである。

またあるIT企業に就職した卒業生は、勤務時間外の学習課題が多すぎ、仕事関係以外の本を読む時間が全くない状況に耐えかねて、1年もたたないうちに大学院への進学を志した。入試の準備のため1年間研究生として過ごしたため、直接大学院に進学した同級生と比べ2年遅れとなったが、真剣に研究に取り組み、この春、首席で博士課程に進んだ。文学部での学問は、どう就職するか、というより、どう生きるかに結びついている。良い就職のため、というより、より豊かな人生のための学問なのである。

多くの学問を学ぶことは理想ではあるが、僅か2年の学部生期間にそれを目指せば、多くの成果を享受するだけで、学問のしかたは身につかないであら

う。一見文学部の専門は細分化されているようであるが、そのどれもが、一生かけても学びきれない奥行きを持っている。学問的な姿勢を身に着けるためには、分野を絞らざるを得ない。

私は、教員になってから、半年ずつ、ドイツとアメリカとで暮らす機会を得た。日本研究の部門に招かれたので、日本語で学問的な話ができるという贅沢を楽しんだが、滞在中いくたびも、もっと外国語を学び、外国の文学や思想を学んでいたらこの時間をどれほど有意義に過ごせたであろうかと思った。それまで外国研究の道を考えたこともなかったのが残念で、これから選択できる諸君を羨ましく感じる。

学問を職業に結びつけるかどうかはさておき、せつかく文学部で学ぶなら、先ずはどの専修課程が自分にあっているか、よく考えてもらいたい。文学部では卒業論文や特別演習に示されるように、講義を聞いて知識を得、あるいは理解を深めるだけではなく、自ら学問を担う経験をすることが求められる。取り組む気になれない学問を選んでは、学問する楽しみが味わえず、卒業も危ぶまれる。

自分に合った学問を選ぶには、候補となる分野の教員の著作を、一般向けの本だけではなく、研究書や雑誌論文まで読むとか、先輩の話を聞くとか、文学部の授業を取るとかといった意識的な活動が必要だ。思想系のA群や文学・語学系のG群では内定後に授業に出てはじめてから専修課程を選べるようになっているが、他の専修であれば、より早い時期に決めなくてはならない。1年生の内から、自分に向けた学問を探して欲しい。毎年転学部者を迎え入れている立場からすれば、理系含めどの科類の諸君にも一度は考えてもらいたい。

なお、一度専修を選んでも、進学後変更することもできる。進学選択の原則から、進学選択時に希望したとしても成績の関係で入れなかった専修に転じることは認められないが、早くから転専修先の演習や授業を取っていれば、4年進学時に転専修して、1年間で卒業することもできる。もっとも、学ぶべき学問に出会えたなら、1年遅れることなど苦にならないというのが文学部の世界であろう。